

一九四七年 二月

失、「婚姻」と再調査。戦前最終号は東北の一部地域
以外は焼失のため未発送。古稀記念文集はいよいよ
刊行。

一九五一年十月まで『日本民俗学のために
柳田国
男先生古稀記念文集』全十輯発行。

出典：『民間伝承』、『民俗台湾』以外、①橋浦泰雄「柳田国男先生古稀記念会覚書」、②今野円輔「柳田国男と研究会―木曜会を中心に」、③鶴見太郎
「柳田民俗学の東アジア的展開」、④柳田国男「炭焼日記」、⑤「直江広治書簡」、⑥「橋浦泰雄関係文書」などによる。

大会設営という実践面において計画遂行の可能性は、積極的に有能な事務方、連絡役、そして経済面を含めて強力な支持者の有無に関わるといえる。北京大会の計画から延期までの過程において、東京にいる日本民俗学の中心部と現地北京にいる直江の積極的な姿勢、多大な努力、及び両者の間の密接な連絡が明らかであり、現地の有力機関の支持の下で大会は開催するためのすべての準備作業を完成した。大会の挫折は日本民俗学の意欲や理論とは関係せず、病気という個人的な状況、飛行機の手配困難という外在的な理由によるものであった。最初北京行きの同行が決まっていた平山敏治郎（当時京都帝国大学文学部西田直二郎研究室の助手）は、西田の了解と文学部の許可を得て、予防注射まで済ませ、北京行きの準備を整えたが、「中止としまると、内心ビクビクしてはいたものの、大いに残念な気持ちをもったことは覆えなかった」と回想している³⁹⁾。

3 日本民俗学の再編成

1 「比較民俗学」——実践への模索

一方、理論構築、具体的には「比較民俗学」という理論面では状況はどうであったのか。

藤井隆至は一九二〇年代の「世界民俗学」の文脈で一九四〇年以降の「比較民俗学」発言を「アジアの各民族が

それぞれ自己の民俗学を確立し、その成果をふまえて各民族の民俗と民俗とを比較研究しようという提案」と理解し、それは日本人の自己認識からすれば異質であり、実際の研究がなく、指導態勢を構築しておらず「一時的な気まぐれ」⁽⁴⁰⁾であったという。

そして鈴木満男は、民俗学と民族学との関係において「比較民俗学」の構想を考察しているが、その第三段階つまり『民俗台湾』座談会段階を「大東亜比較民俗学」と名づけ、「大体此方の言葉の中から、簡単な覚え易い良い言葉をその目標として行つたらしい」という柳田の発言に実感が伴わないとして「いかにも実のないもの、時局に対する政治家、柳田のリップ・サービスに過ぎないもの」⁽⁴¹⁾と総括している。

一九四三年の段階において、柳田の構想は果たして一九二〇年代の「世界民俗学」と同じように各民族各自の民俗学の確立とその成果を踏まえての比較研究であったのか。そして果たして実践に向けての姿勢が欠ける「一時的な気まぐれ」や「リップ・サービス」だったのであろうか。

■言葉の問題と柳田国男の模索

これを検討するには、言語の問題についての柳田国男の姿勢が重要である。第1章で論じたように、そもそも柳田の理論樹立には「民俗語彙」が重要な柱であり、言語の問題はいわば方法論と深く関わるからである。かつて一九三〇年代、柳田は言語の障壁が存するかぎり民俗学はナショナルなものでしかないと言っている。この問題を念頭におけば、戦時下の古稀記念会にみる柳田の言動は、決してリップ・サービスや一時の気まぐれではなかったことが明白である。なにより彼はこの言葉の問題の解決を模索していたからである。

柳田の理論的な構想を再現する資料として、一九四三年、古稀記念会の一環として行われた二回の座談会、すなわち柳田、橋浦、浅野晃による『文芸春秋』九月号座談「民間伝承について」と十月十七日柳田、橋浦と『民俗台湾』同人との座談会がある。

『文芸春秋』座談会において、現実に寄与できる問題について忌憚のない意見を柳田に求められた浅野はジャワでの経験から「在来の英米流の殖民政策とまつたくちがつた行き方を確立して行く」には民俗学を常識にする必要があると答えた。すると、柳田は「私は大東亜圏内の文化の共通点というものを見つけて、それに近づけて両方から寄り合うことが非常に大事」だと主張しながら、しかしそこには言語の問題と、日本文化自身についての理解不足という二つの難関があると指摘している⁽⁴²⁾。

言語の問題について、「たとえば台湾とか満洲、朝鮮、これは今『民俗台湾』とか、『朝鮮民俗』という会誌ができてやつているんですが、言葉がちがつているから、よく読んでみると、両方同じものでも、まず言葉の説明に半分費やしているようなわけなんです」と問題を指摘し「この点早く整理がついて、簡単に問題の内容がバツと頭にくるようになると、たいへん都合がいい今後インドネシアのどの民族にもシナにも行けるんですからね」⁽⁴³⁾と述べている。即ち同じ内容をさす地域間の言葉の違いを超えた、理解しやすい指示法を開発すべきであり、それは台湾、満洲、朝鮮でまず考案されれば、中国のような長い歴史と高度な文化を持つ国にもインドネシアのような未開民族にも応用できるという主張である。

『民俗台湾』座談会では、さらに具体像を提示されている。柳田は「大東亜圏内」の「交通を、妨げているのは言葉」であると指摘し、その解決法として「あなたがちに言葉にはかかわらないで、実質的な内容上の標目を拵えて行く」方法が必要とする。具体的に以下のようなものである。

正確な記録としてタブー、或はトートেমというものの索引を作ればいいが、まず最初の共同研究の共通題目としては、総括的な、例えば婚姻とか婚姻の約束、解消というような今風の（中略）言葉を使つてなるべく一般に皆がやれるようにしたい。

つまり方法は二つある。一つは共通な問題になれる題目、一つは「民俗語彙」から一般化した用語であり、この両者には段階の差があるということである。

共通課題は共同採集や意見交換のためのもので「なるべく一般に皆やれるやう」な「今風」の言葉が必要である。古稀記念会の「国際共同研究課題」はまさにその一つの試みであった。注意すべきなのは、この「今風」の言葉は決して「国際共同課題」に限っての措置ではなかった。たとえば『民間伝承』特集号十二月予定の「婚姻」を見れば、ここであげられている「婚姻の約束、解消」に負けない抽象的な用語「婚約」や「離婚」が使われている。

それに対して後者は資料を記録、整理、提示するためのものであり、共通課題と比べ学問の基本作業と関わっているだけに、もっと正確さ、洗練さと有効性が求められている。その場合想定されたのがまず「タブー」「トートム」のような欧米民族学・民俗学が一般化させた古典的な術語であった。しかし、欧米人類学に対して強い対抗意識を持ち、日本の現実に着した「民俗語彙」を生かそうと苦心してきた柳田にとっては、当然、これに対して不満が残る。前記鈴木満男が言及した「大体此方の言葉の中から、簡単な覚え易い良い言葉をその目標として行ったらいい」という発言には、日本の「民俗語彙」を精選し、他の地域に適用してみるによって一般化の道を探る柳田国男の意図が読み取れる。

さらに、一九四五年二月、柳田は『台湾民俗』に以下の投書を寄せている。

自分は御教育を受けて是でも少しは台湾の言葉をさとり得る方であるが、なほ名称の難関が苦痛に近い。是こそ民俗学の世界提携の望み遥かなる原因であらう。勿論互ひの語を同程度にわかるやうにするのが、正攻法であるが、其前に編輯者も心がけられて、あまり数多く難易さまざまの語をはいやうに排列せず、殊に重要な又興味のある語彙の少々を輸出するやうに努められたい。タブーとか、トテムとか、マナとか、ポトラツチとい

ふ語などは少数民族の用語だが、世界の人が皆知つてゐる。(東京 柳田国男)⁴⁴

「台湾の言葉」というのは中国語であろうが、雑誌の場合漢字である。一九三九年の「続かちかち山」では欧米人より日本人の方が馴染み易い「四角い文字」は、ここでは「苦痛に近い」「名称の難関」となっている。一九三九年の文章は、「比較民俗学」の実践を意識してのものではなかったという本論第1章の説は、ここで一つの傍証を得た。

そして注目すべきなのは、「重要な又興味のある語彙の少々を輸出するように」という提言である。ここで「此方の言葉の中から」だけではなく、台湾においても能力ある者（ここでは「編輯者」、具体的に金関や池田をさしているが）に対して、地域の個性に密着する「民俗語彙」の中から、一般化することが可能なものを探し出し、意識的に普及させる努力を求めている。

台湾は日本の最も古い植民地であり、当時既に五十年を迎えた。中国文化と日本文化が長年混じり合う台湾の文化的環境は、柳田にとって中国大陆を主とした対象に比較民俗学という実践を展開して行くための絶好の「実験台」でもあった。

この投書の執筆は、古稀記念会が進行する只中ではなく、最も積極的に準備活動を進めていた北京での国外大会も延期となつてからのことである。しかも座談会のように応酬を必要とする状況ではなく、一読者としての投書であつた。柳田国男の台湾民俗を理解する意欲、「比較」のために模索する真剣さが改めて了解されるだろう。

■「比較」への視線

方法論の角度で「比較民俗学」を検討している鳥越皓之は、柳田国男における「比較民俗学」を、①将来の可能性として想定されていた時代、②朝鮮や台湾すでに民俗学研究が行われており、比較民俗学が可能と考え、朝鮮

や台湾の研究者に勧めた時代、③戦後の『海上の道』の時代と区分している⁽⁴⁵⁾。同時に、同じ第二段階であるが、一九四〇年の『朝鮮民俗』寄稿と一九四三年の『民俗台湾』座談の間、柳田の姿勢が積極的になったという変化があるとするが、貴重な指摘である。しかし鳥越はその理由が不明であるとし、その間の三年の時間のズレが個人に変化を与えたか、或いは『朝鮮民俗』にくらべて『民俗台湾』の方は研究者の層が厚く場所的にも恵まれていたかもしれないという推測を述べるに留まった⁽⁴⁶⁾。

『民俗台湾』座談会とほぼ同時期の『文芸春秋』座談会において柳田が朝鮮と台湾に同じ位置づけを与えているところをみれば、鳥越の二番目の推測は成り立たず、三年間の時間の意味が大きかったという理解が有力である。しかし、それについて考えるには、柳田個人だけではなく、もっと日本民俗学の全体の動きを把握する必要がある。結論からいえば、「比較」という問題を真剣に考えるようになった動きは一九四二年以降に木曜会の中心メンバーの中で顕著になってきたのである。

もともと昔話など国際的な比較が進んでいる分野に関心がある閑敬吾は、早くから日本の民俗を明らかにするために外国の例を知り、特に近隣との比較の必要を強調している。第1章ですでに一九三八年七月、関は李猷璋『台湾民間文学集』を紹介するに際し、「吾が国の伝承を明確にするためには近隣の資料との比較の必要のあることは云ふまでもない」（『民間伝承』三一―二）と主張していることにふれた。下つて一九四〇年四月も関は「何れも直ちに吾々の資料として利用することは出来ないが、比較研究上もつて両者の間に提携する必要はあらう」（『台湾の昔話』の紹介、『民間伝承』五一―七）と述べている。

師である柳田はまだ「比較」に言及しなかった、或いは言及するものの、否定的な態度を示していた頃の発言であった。当時の木曜会では関はど国外との比較を積極的に主張する者は他にはいなかったが、日本以外の状況への目配りはあった。

たとえば、民俗語彙を活用しての民俗研究を展開し、その意味で「柳田民俗学の最も正統な後継者の一人」⁽⁴⁷⁾と

評された倉田一郎は、実は『民間伝承』でいち早く日本以外の民俗事象について紹介する人物でもあった。

一九三七年二月、彼は『民族学研究』三―一を取り上げ、「管轄の外には在るが、『大興安嶺東南部オロチヨン族踏査報告』泉靖一氏にはオロチヨンの宗教生活特に忌に関して参考になる資料がかなりある。この他祭団の生成発展を扱った『中部高砂族の祭団』馬淵東一氏、『オロチヨン民具解説』秋葉隆氏などがある」と紹介している。その後も、台湾や蒙疆についての民族学研究に注目している。

直接わが国の船おろしとの関連がないが、これによつて与へられる示唆は決して少なくない（鹿野忠雄「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」の紹介、一九三八年五月）。

蒙疆^{（マヤ）}地区に住むソロン族のことは従来ほとんど知られてゐなかつたのであるが、本書に依つてほぼ明らかに知られるに至つたことは有難い。民族学方面の本ではあるが、随分日本人の生活と近いものを感じたので紹介する次第である（上牧瀬三郎『ソロン族の社会』の紹介、一九四〇年十一月）。

一方、紹介するに当つて「一国民俗学」への配慮があり、「管轄の外には在るが」、「直接わが国の船おろしとの関連がないが」、「民族学方面の本ではあるが」とあるように、必ず前置きをしていた。

しかし一九四二年八月の「新しき国風の学」^{（48）}になると、状況が変わつた。

倉田はそこで民俗学によつて「国風」を理解することは「日本の国ぶりを訊ねられるといふが如き、些々たる場合だけの用意ではない」として、「この広大な地域に於ける共栄圏の指導者として立つ日本民族」にとつては「之を明かにわきまへおく事に依つて、共栄圏諸民族の土俗を比較的に把握することが可能だからである」と主張している。すなわち「寔に民を治むの要諦はその俗を識るに在り、ひとの俗を知るは己がてぶりを知るに在る」という

ことであり、民俗学は「新しき国風学」と同時に「大東亜の教養学として」の意味もあると彼は説いている。

かつて「時局下の民俗学」（一九三九年三月）を発表した倉田は、一貫して民俗学の時局への寄与に強い関心を寄せているが、しかし、一九三九年のとき「彼此両国の民俗学に依る両民族の生活の究明比較に俟つ」と「国民民俗学」の枠を堅く守っていたのに対して、一九四二年は日本民族の研究を強調しながら、その先に展望されているのは「土俗を比較的に把握すること」になったのである。

下って一九四三年五月号『民間伝承』九一二ではあまり外国のことにふれてこなかった大藤時彦は『台湾民俗』三一二を紹介している。そこで彼は「内地の民俗と類似してゐるもののあるのは誰にも指摘出来る所であるが尚忠実なる資料の採集報告を第一歩としたい」としながら、「その上での両者の比較研究は彼我の間に意外の連絡のあるものの発見されるだらうことは今から想定なし得る」と展望し、最後に「本島語に出来るだけ読仮名と注解を付して貰ひたい」と注文している。真剣に比較を考えて、その言葉を理解しようとするからこそ、読み方の表記や詳しい説明がほしいのである。

一九三五年から一九四四年まで『民間伝承』は計十巻発行されたが、歴代編集責任者を整理すると、守随一（第一巻、一九三五年九月～一九三六年八月）、大間知篤三（第二巻、一九三六年九月～一九三七年八月）、大藤時彦（第三巻、一九三七年九月～一九三八年八月）、橋浦泰雄（第四、五巻、一九三八年九月～一九四〇年九月、第八、九、十巻、一九四二年三月～一九四四年八月）、倉田一郎（第六巻、一九四〇年十月～一九四一年八月）、関敬吾（一九四一年十月～一九四二年二月）の六人しかいなかったことがわかる。当時、守随と大間知は満洲で調査研究に従事している。残ったメンバーの間にも「比較」への視線がすでに熱くなっており、彼らによって古稀記念会を機に満洲で民俗学大会を催す案を提出されたのである。

柳田が「比較民俗学」に対して積極的な姿勢を示すようになったのは、古稀記念会の国外大会が決まった一九四三年後半からのことであり、その前にすでに彼の周りに「比較」へ進む雰囲気醸し出されていたことが重要であ

る。

そしてこの段階の柳田国男の「比較」に対する姿勢の変化を理解するには、彼独自の現実判断も重要な要素である。一九四三年初、『日本読書新聞』は「出版界新編成への期待」として、社会各界に国家総動員法に基づく出版統制令に対する意見を求めた。柳田は「著者にも当局にも考へてもらひたいこと」として以下の三つをあげている。

一、最も望ましい「読者」の三分の一が村に住し三分の一は海外にゐるといふことです。都会に本を買ふ人が多いが大部分はなぐさみのため効果があとに残りません。

一、少壮有識者の将来に働くべき人が今陣営生活をしてゐて良書の手に入らぬのを淋しがつてゐます。

一、半分読んで見て又かと感ずるやうな同質同内容の本は成るだけ出させない方がよいでせう、それを見かけるだけの労はそこで執つて下さい⁽⁴⁹⁾。

最も望ましい「読者」は自分の生活の実際問題に関心があり、書物の中で解決の手掛りを探そうとする人々である。内地の都市と農村だけではなく「海外」にもそうした読者が三分の一いるという認識は重要である。合わせて実際その多くが中国を中心とする内地以外で「陣営生活」を送っている「将来に働くべき」「少壮有識者」への配慮を促しているところを見れば、自分の学問がもはや「一国」で完結することができないという認識は社会使命感の強い柳田にはあっただろうと思われる。すると古稀記念会、特に満洲大会の提案は、柳田に内地以外に向けて学問を展開させる直接な契機を与えたといえる。

勿論、理論の形成は時間を要することである。柳田の「一国民俗学」の理論は十数年ないし数十年の模索の結晶であり、「比較民俗学」の理論も一朝一夕には望めない。実践への意欲があり、模索が始まったことが重要である。

2 国外世話人——組織上の変化

内地以外に日本民俗学を展開させるといふ実践の意欲は、研究者個人レベル、或いは民俗学組織の中央部だけに留まらなかった。一九四二年以降、比較の視線が強くなりつつあった時期は、同時に日本民俗学の組織面に変化が生じた時期でもあった。

『民間伝承』は会員専門誌として四六倍版四段組八頁から発足したが、二二二（一九三六年十月）以降十二頁に増頁し、七一五までこの形式を保っていた。七一六号（一九四二年三月）で表紙をつけ三段組二四頁にし、初めて定価を表示するなど⁽⁵⁰⁾、市販へと動き出した。この動きは六人社の戸田謙介の支持を得て、四月号を休刊して、五月の八一から菊版三段組六四頁という普通雑誌の体裁に形式を切り換えて再が発し、七月三〇日付で第三種郵便物として認可された。その後頁数の増減があるが、この形式を保っていた。

雑誌の体裁変更については、柳田国男はその第一号にあたる八一の巻頭言「新たな目標」において、「我々少数者の協同では、思ふように資料が集めにくく、是非とも外部の理解者を得なければならぬ」と、「もつと盛んに民間伝承の知識を利用しなければならぬ」といふことを、認める人が多くなつて来た」とことという「二つの刺戟」を受けてのことだと説明している。誌面をみればその後も民間伝承の会会員の投稿が主であるが、同号の「寄稿案内」で「本誌の読者は何人でも寄稿随意」とあるように、名目上はすでに会員専門誌ではなくなった。この普通雑誌への形式変更は民俗学が次第に市民権を獲得したことを示していると同時に、そのさらなる普及に大きく寄与することとなった。

民間伝承の会会員は日中戦争が勃発してから、様々な身分で中国をはじめとする日本内地以外の地域に赴いていたことは、すでに述べてきた。この傾向は太平洋戦争が始まって日本の占領地が拡大することに伴い、一層顕著になる。

なく会員を有することが理想」と協力を呼びかけている。

民間伝承の会の「本会小規」は、創立当時から度々『民間伝承』誌上に見られるが、しかし会の趣意書とセットで登場することはこれまでなかった。注目すべきなのは世話人の欄には、東北から九州まで列記し、東京の木曜会メンバーを載せた後、改行して「大間知篤三（新京）、守随一（新京）、直江広治（北京）」と記しているところである。

守随や大間知は会創立初期からの世話人であったが、中国に赴いた後、世話人の欄から消えていた。一九四一年十二月の『民間伝承』七・三に、「〔新京〕大間知篤三、守随一」という表記が見られたのも、「維持会員」としてであった。しかし、この一九四三年二月時点では内地以外の会員としてふたたび世話人となった⁵³。ここに「一国民俗学」を掲げた日本民俗学の海外進出に対する態度に根本的な変化が起こったと見るべきであろう。世話人は民間伝承の会の組織的活動を展開するときの要であり、この中に加えられた者は、日本民俗学に対する組織上の貢献が求められているからである。

一九四二年以降『民間伝承』の普通雑誌化、会員の国外行き増加、木曜会の二〇〇回記念（一九四二年十二月十三日⁵⁴）、会員の激増などを背景に民俗学再編成の機運が高まり、その中で国外の中心会員の活躍も視野に入ってきたのである。

『民間伝承』九・五（一九四三年九月）の「会告」では「会員名簿はややもするとこれを悪用する者のあるため、従来印行を差し控えていましたが、今日ではその虞れも薄らいだように思えるので、近く印行して現会員には洩れなくお送りします。最寄りの会員諸氏は研究会に其他に御活用あるよう希望します」と報じられている。

前号で古稀記念会計画が発表されたばかりである。この時期で会員名簿の作成が決められたのは、これからの発展に備えて民間伝承の会の全容を把握するためと思われる。会員名簿は実際完成したのが一九四四年十二月であった。そこに二二一八名の会員の氏名及び住所が載せられており、内地以外、樺太八名、台湾八名、朝鮮三八名、

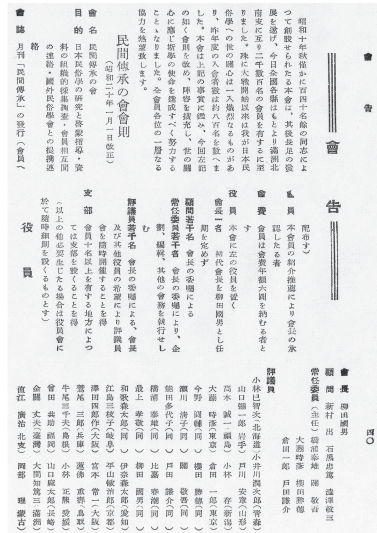


図 22 「会告・民間伝承の会会則」
(1945年 1月 1日改正)
出典：『民間伝承』10－7・8合併号、1944年
8月（実質年末発行）、40頁。

満洲五二名、中華民國二〇名の計一二六名の会員
がいた⁽⁵⁵⁾。

一九四四年末に発行された『民間伝承』一〇・
七・八合併号には、「会告」が載せられている(図
22)。

昭和十年秋僅かに百四十名余の同志によつて
創設せられたる本会は、其後長足の発展を遂
げ、今日全国各県はもとより満洲南北支に互
り二千数百名の会員を有するに至りました。殊に大戦開始以来は我が日本民俗学への世の関心は一入熾烈なる
ものがあり、昨年度の入会者数は約八百名を数へました。本会は上記の事実に鑑み、今回左記の如く会則を改
め、陣営を拡充し、世の関心に応じ斯学の使命を達成すべく努力することとなりました。

合わせて「(昭和二十年一月一日改正)」とある「民間伝承の会会則」が載せられている。
一九四三年三月時点で「千数百名」という会員数は大幅な増加を見せ、海外からの入会も急激に増え、一九四四
年末にはすでに「全国各県はもとより満洲南北支に互り二千数百名の会員を有するに至」った。高まっていた民俗
学再編成の気運は、この初の「会則」の作成、公布によって、従来緩やかな組織を、「学会」として制度化してい
こうとしている。それにふさわしく、目的には従来の民俗学の「啓蒙指導」以外、「国外民俗学会との提携連絡」
という項目が追加され、そして役員、顧問、評議員などの形式も整えるようになった。
初代会長は柳田国男で、顧問は新村出、石黒忠篤、洪沢敬三の三人、常任委員は橋浦泰雄を主任として、関敬

吾、大藤時彦、倉田一郎、桜田勝徳、戸田謙介などが名を連ねている。評議員は従来の世話人とは一緒であるが、変化は二つあった。一つは従来地方を列記してから東京を記す形を変え、北海道、青森、岩手、山形、福島、新潟、東京、愛知、岐阜、京都、大阪、兵庫、鳥取、島根、愛媛、福岡、長崎と北から南へ順次掲載していること、もう一つは内地以外、「金関丈夫（台湾）、大間知篤三（満洲）、直江広治（北支）、岡部理（蒙古）」などの名前が見られることである。

しかも、これは一九四三年の踏襲でも拡大でもなかった。なにより氏名の下に記される地名は前回のように「新京」や「北京」という具体的な都市名ではなく、これからそれぞれ管轄すべき広域の地名、同時に行政上の単位でもある「台湾」、「満洲」、「北支」、「蒙古」となっており、それはまた内地以外の民俗学大会が予定されている台北、新京、北京、張家口と対応関係を有している。

これまでの民間伝承の会の地方世話人は、ほとんど日本民俗学で名前が知られている人物であった。それに比べ岡部理は大間知の紹介で入会したばかりの者であった。そして金関丈夫は古くからの会員ではあるが、台湾において専門は解剖学であることもあり、これまであまり日本民俗学に関わっていなかった。これら人選はあきらかに古稀記念会の国外大会と呼応しており、これまでの成り行きの結果ではなく、これからの発展のための布石であるといえよう。

日本民俗学は、柳田国男古稀記念会を契機に「一国」を越えて再編成を試みていた。理論面では、柳田によって「比較民俗学」の方法樹立に向けての模索が始まり、組織面では、台湾、朝鮮、満洲、北支、蒙疆などの近隣地域に積極的に関わろうとしたのである。